

セッション

1

# 技術系勉強会が熱い

■ 吉岡弘隆 (楽天 (株))

## 勉強会がすごい

IT 勉強会カレンダーというのがあります (図-1)。このカレンダーには IT 系の勉強会の開催日時、開催場所などの情報が掲載されています。“はなずきさんと愉快的仲間たち”というグループが、自分たちの興味のある IT 系勉強会の情報を文字通り手作りして収集・編集したものです。

IT 勉強会カレンダーは、2008 年 5 月頃から編集されています。当初は、はなずきさんの個人的な趣味で編集されていました。このカレンダーによって、IT 系の勉強会が日本各地で活発に開催されているということが可視化され、IT 系勉強会のブームというような様相を呈しています。

このカレンダーを見ると、日本全国各地でおびただしい数の勉強会が開催されていることが分かります。開催場所は東京が多いですが、大阪など近畿圏、福岡、札幌など政令指定都市でも活発に勉強会が開

催されています。このカレンダーには、社内勉強会や参加が制限されているもの (たとえば会員限定のセミナーなど) は掲載されていませんので、実態としてはさらに多くの勉強会が開催されていると言えるでしょう。

勉強会の隆盛の背景、学会や大学等にとっての価値や意義などを考えてみます。そして、学会や大学などの組織にとって、勉強会とのコラボレーションがどのような価値を生み出すのかについて述べていきます。

## 勉強会とは何か

従来から勉強会は開催されていました。それらと今回ここで取り上げる勉強会とはどのような違いがあるのでしょうか、そしてなぜ今勉強会なのでしょう。

ここで取り上げる勉強会は、勉強会主催者によっ



図-1 IT 勉強会カレンダー  
<https://www.google.com/calendar/embed?src=fvijvohm91uifvd9hratehf65k%40group.calendar.google.com>

て自発的(ボランティア)に開催されている非営利のセミナーを指すことにします。研究室あるいは会社などの閉じた組織の中で行われるセミナーも勉強会には違いありませんが、ここでは広く一般に公開されているものを中心に紹介します。また商用の教育セミナー、イベントなどは含まないこととします。

## ■ 勉強会の特徴

勉強会の規模は、数人から100名程度までさまざまです。オープンソースソフトウェアのユーザ会の有志が中心になって開催する比較的大規模(100名を超えるもの)なカンファレンスも、広い意味では勉強会といえます。参加費用については、無償ないしは少額の場合が多く、コミュニティ活動の一環として勉強会を開催することもあります。前述したIT勉強会カレンダーに載っている勉強会はその名のとおりIT系の勉強会が多いといえます。

勉強会がボランティアによって開催されているということは重要な特徴です。商用製品の教育セミナーや、大学あるいは各種学校の教育と違い、業(なりわい)として教育を行う人たちではない人々によって運営、開催されているということです。

開催者がボランティアで、参加者も自分の興味にそった勉強会に自主的に参加しています。大学の授業と違い、それに参加することによる単位の認定もなければ、それによって資格を獲得できるということもありません。あくまで、興味があるから参加するというのが原則です。

かかった費用を参加者でいわゆる割り勘にするなど、結果として無償ないしはきわめて廉価な参加料になっています。講師もそれを職業にしている人ではなく、普通のエンジニアなどが行う場合が多く、講師料なども通常は発生しないか、あったとしても薄謝です。これは、その活動が営利でないという点に起因しますが、活動主体がボランティアで、各種運営コスト(人件費、講師料など)が安いという特徴にもよります(表-1)。

	勉強会	教育機関	商用セミナー
講師	非専門家(教育を業としていない)	専門家(教員)	専門家(セミナーを業としている)
主催者	ボランティア	教育機関	ベンダ
費用	無償ないし廉価	授業料	セミナー代(ベンダ製品の無償セミナーというのものもある)
権威、認定制度	ない	ある	場合による

表-1 勉強会・教育機関・商用セミナーの比較

## ■ 勉強会の開催まで

勉強会は主催者が、その内容、講師、開催場所、日時などを決定し、それを告知することによって参加者を募集します。

かつては告知の手段が限られていましたので、参加者は会社あるいは研究室の同僚、友人、知人など比較的限られた範囲になっていました。

インターネットが日常的なメディアになって、メーリングリスト、ブログ、SNS、あるいはTwitterのようなマイクロブログ等、告知のメディアが多様化し、告知のコストが激減したため、広い範囲への告知が可能になりました。勉強会の情報を自分のブログなどに掲載しておけば、のちに検索エンジンなどで発見されます。また、勉強会的主催者だけではなく、参加者にブログ等で感想を記すというプラクティスが徐々に実践されてきていることもあり、ますます多くの人に発見されやすくなってきています。

また、ustream.tvやニコニコ生放送などの動画配信サービス、Twitterなどによる実況など、コンテンツの配信が手軽になり、資料の公開だけではなく、その内容もライブで公開されることが一般的になってきました。そして、動画のアーカイブによって、時間と空間を超越して、勉強会の場がインターネットに存在するようになりました。

その結果、広く参加者を募れるようになり、参加者の多様性がある程度担保されるようになって、勉強会の「熱」が拡散されるようになってきました。

閉じた勉強会から開いた勉強会への転換によって多様な参加者の交流などが発生し、勉強会の価値、その楽しさ、面白さなどの共有などが、緩やかに

われるようになりました。さらに、勉強会の開催が増え、勉強会の運営のノウハウなども参加者および主催者の間で共有されることにより、開催コストが低減し、ますます開催が活発になるというフィードバックがかかっていると筆者は感じています。

## ■ 勉強会が必要とされている背景

IT系の勉強会の隆盛は、勉強会開催の敷居（コスト）が下がっただけではなく、それだけ多くの人にとって勉強会が必要とされているということを表しています。単なる知識を得るためだけであれば、書籍、セミナー等で獲得できるでしょう。それにもかかわらず多くの勉強会が開催されていることには何かしらの理由があるはずで。

書籍などに記述されたものは、整理され形式知化されたドキュメントです。学術的な論文であれば、それは査読者等による批評にたえ得る内容でなければなりません。

一方、勉強会では、そのような学術的な内容や形式知だけではなく、むしろ、ちょっとしたノウハウや形式知になりにくい暗黙知のようなものも含めて広く議論されています。

10の勉強会があれば10の異なるコンテキストで参加者が一体になってその『場』を作っていくという“ライブ”の性質があります。

勉強会に参加するまたは開催するメリットは、(1) 知らなかった知識を得られる（狭い意味での学習、知識の獲得）、一人では勉強するものが難しい知識を得られる、(2) その道の専門家や同じような境遇の人と出会える、(3) 開催することによってさまざまな仕事では得にくい経験を得ることができるということです。

従来は暗黙知として技術移転が難しかったノウハウなど、「人との交流によって緩やかに伝搬していく」ことに集約できます。また、勉強会の開催そのものの経験はイベントの段取りをつけることから、人間的なコミュニケーションのとり方、プロジェクトの遂行の仕方などさまざまな経験を与えてくれます。そのような経験は必ずしも形式知としては得に

くいことでしょう。

インターネットの技術の多くはインターネットそのものを利活用しながら発展してきました。そして、インターネット上のアプリケーションの多くも、オープンソースソフトウェアという公開されて発展してきたソフトウェアを利用することによって作成、運用されています。

従来、私たちがベンダ製品を使う場合、その製品の情報を得るには、ベンダの教育コースを受講する、あるいはマニュアルを読む、サポートに問い合わせる等の方法しかありませんでした。インターネット上に掲示板などありますが、何の保証もされません。

一方、オープンソースソフトウェアの場合、通常はそのような特定のベンダがいるわけではなく、コミュニティのメーリングリストなどで自由に議論がされています。LAMPと呼ばれる、Linux/Apache/MySQL/Perl/PHP/Pythonなど、定番のオープンソースソフトウェアは、ユーザグループなども多く、それぞれのコミュニティで勉強会や各種カンファレンスを開催しています。

そのようなオープンソースソフトウェアを使うにあたっては、マニュアルに書いていないことや、体験したトラブルなど、事例がとても役に立ちます。また発表者にとっても、自分の経験をまとめることは業務上大きなメリットとなるでしょう。さらに質疑応答などを通じて発表者にも新たな気づきが発生し、そこに参加した人すべてにメリットが生じます。

勉強会はインターネットの基盤技術やその上で利活用されているオープンソースソフトウェアと非常に相性がよく、その活動を通じてさらにそれらの技術が発展していくというフィードバックがかかっています。

## ■ 筆者の経験

語学の勉強や地域サークルあるいは趣味サークルではなく、IT系の勉強会の存在理由を時代背景とともに考察してみます。

筆者自身、基盤系技術者としてのキャリアを積んだので、基盤系技術というところにバイアスがかか

っていることをあらかじめご容赦ください。

かつて、80年代頃までは、ハードウェアベンダがCPUから、OS、コンパイラ、ミドルウェア(RDBMSやWebサーバ)、アプリケーションなど一切合切、一社で提供していました。いわゆる垂直統合の時代です。その当時、基盤系技術はすべてプロプライエタリで、基本的にはハードウェアベンダの中に最先端の技術がありました。「うちの技術」の時代です。

90年代、水平分散の時代になり、オープンシステムになると、CPU/OS/RDBMSなどそれぞれの“ゴリラ”と呼ばれる業界トップのベンダが、各レイヤを支配するようになります。CPUはインテル、OSはマイクロソフト、RDBMSはオラクル…といえは分かりやすいでしょう。

それぞれのレイヤについて業界トップのベンダが出てきたわけですが、技術そのものはプロプライエタリです。

技術の心臓部は各企業が持っているわけですから、その技術を勉強する場合、その技術を持っている会社の 세미나なり、教育コースに行くしかありません。プロプライエタリな技術を持つ当該企業が唯一正確な情報を提供していたのです。

事実、筆者が大学を出て最初に就職したDECという会社は、VAXというハードウェアアーキテクチャ、VMSというOS、BLISSというシステム記述言語、VAX Rdb/VMSというRDBMS、どれもこれも自社製でした。エディタも、コード管理システム、モジュール管理システム、テスト管理システム、開発環境一切合切すべて自社製でした。勉強したければ社内にリソースを探さしかなく、社内にすべてそろっていました。これは当時のコンピュータベンダでは一般的なことでした。

次に転職したOracleという会社は、自社製のRDBMSを持っているので、パフォーマンスチューニングをするにも、バグ情報を検索するのも、すべて社内情報です。OSプラットフォーム情報などは、Sunなどハードウェアベンダに依存しますが、RDBMSそのものについては自社にすべての情報が

あります。

ユーザから見れば、Oracleを勉強したければ、Oracle社が発行するマニュアルを読み、Oracle社のサポートに問い合わせるしかありません。自社内にOracleに詳しい人がいたとしても、最後はOracle社に聞くしかなく、情報の非対称性がどうしても存在します(ベンダがすべての情報を持つという意味で)。

それが、オープンソースソフトウェアの時代になり、すべての情報が公開されるようになりました。Linuxのソースコードは開放されています。PostgreSQLもMySQLもGCCもGDBも、ユーザが好むと好まざるとにかかわらず、そこに情報があります。ソースコードを読もうが読ままいがそこに情報がありません。

筆者も、横浜Linux Users Group (YLUG)で有志とカーネル読書会という勉強会を1999年から行い活動を続けています。

高度に専門的なコミュニティが自主的な勉強会を開催できるのは、オープンソースの隆盛と無関係ではありません。ユーザ会で、単なる利用のTipsやノウハウを交換するだけではなく、さらに専門性を高めていくというパスがオープンソースのコミュニティには存在しています。

ところで筆者がカーネル読書会を開催したきっかけは、筆者自身がLinuxカーネルのソースコードを読みたかったというのがありますし、それを肴に宴会をしたら楽しいだろうなと思いついたことによります。YLUGのメーリングリストで呼びかけてみたところ、初回に30名程度の人が集まってしまって、気がつくとも不定期ながらも10年以上続いています(すでに100回以上開催していて、100回目にはLinuxの創始者であるLinusさんも参加してくれました)。

カーネル読書会という勉強会をきっかけにさまざまな人たちが出会い、Linuxやオープンソースの技術について率直に語り合える場が持てたということは技術者にとってかけがえのない経験となりました。

## ■ 勉強会はスケールする

たとえばプログラミング言語の Ruby に関するカンファレンスとして Ruby 会議というものが有志によって開催されています。そしていろいろな地域で自然発生的に地域 Ruby 会議が開催されています。勉強会というよりも Ruby 好きが集まっているちょっとしたイベントというような色合いのものですが。

やりたい人が参加者を募って開催するので、主催者の数だけ勉強会が発生し、その思いの分だけ新しい勉強会が動いていきます。その意味で勉強会はスケールすると言えます。

## ■ オープンソースが生み出した価値創造の連鎖、エコシステム

勉強会が生み出している価値を考えてみましょう。

たとえば、オープンソースの利用事例など、綺麗にまとめられる前のさまざまな経験が率直に情報交換されています。学会と違い、新規性や、独創性は求められません。むしろ、現場のどろどろとした生の情報がやりとりされています。それこそ、「インストールではまった」とか、「バグを踏んで困った」とか、そのような個別具体的な話で盛り上がりたりします。従来はなかなか共有されにくかった情報が、勉強会というプラットフォームで日常的に議論されているのです。

玉石混合のイメージがあるかもしれませんが、実は、その混沌にこそ新しい知識創造の息吹があるのではないかと、そのような予感がします。

オープンソースソフトウェアの価値創造方法は、従来の1つの組織（たとえば、企業の開発部門や大学の研究室）が生み出す方法とはまったく異なります。

オープンソースソフトウェアはバザールモデルとして知られるソフトウェア開発方法で開発されています。多くのボランティアによって開発されていきます。オープンソフトウェアとして最大級の規模を誇る Linux では、数百人以上のプログラマーが開発に参加しています<sup>☆1</sup>。

価値創造の源泉が社内にあるのではなく、社外にあります。

いわゆるオープンイノベーションは、まさに、そのようなパラダイムです。

## ■ 勉強会勉強会

それぞれの勉強会にはそれぞれの思いがあります。独特の「熱」があります。一方で、勉強会を開催するコツ、ノウハウなどもあります。そのようなノウハウは、必ずしもすべてが形式知化できるわけではないので、さまざまな試行錯誤を経て、徐々に運営主催者の暗黙知として獲得されていきます。

たとえば、勉強会を継続する、あるいはコミュニティを継続するというようなものは、コミュニティの独自の文化や事情があるので、これが正解というのはもともと存在しません。

しかし、そのような事情があるにせよ、共通の成功パターン、失敗パターンがあるのではないかと筆者は考えました。そこで、勉強会開催、運営のノウハウ、悩みなどを情報共有、情報交換するための「勉強会勉強会」という勉強会を立ち上げました。

2008年 OSC (Open Source Conference) で開催した「勉強会大集合」というパネルディスカッションのメーリングリストが、その母体です。

勉強会を開催するときの、会場の探し方、懇親会の開催方法、講師のを見つけ方、告知の方法、参加登録の仕方、等々、勉強会に関することならばなんでもメーリングリストなどをベースに議論しています。

実際に会って情報交換するために、勉強会カンファレンスを2009年、2010年に開催しました。今年も6月頃に開催する予定です。

## ■ 勉強会を続けるコツ

数々の勉強会を見聞きすると、長いこと活動が活発なものもあれば、いつのまにか活動が終了あるいは立ち消えになるものもあります。運営主催者が一

☆1 誰が Linux を開発しているか  
[http://www.linuxfoundation.jp/jp\\_uploads/whowriteslinux.pdf](http://www.linuxfoundation.jp/jp_uploads/whowriteslinux.pdf)

生懸命かなり手間暇をかけどうにか回っているものの主催者のモチベーション次第で、たとえば業務が多忙になり活動が続けられなくなるなどのケースも見られます。

勉強会が続くパターンを「よしおかの勉強会の法則」として公開しています。

### 勉強会を開催するメリット>勉強会を開催するコスト(個人的な負担)

#### (よしおかの勉強会の法則)

勉強会開催メリットが開催のコストを上回っていれば勉強会は開催されますし、その勉強会は続きます。結局のところ、メリット(左辺)を上げるか、コスト(右辺)を下げるかしかありません。メリットは、それぞれの勉強会のコンテキストによって、さまざまなものがありますので一概に言えませんが、コストを下げるパターンはいくつかあります。勉強会開催運営のノウハウや Tips を交換することによって、勉強会開催のコストを下げられます。そうすればますます良質な勉強会が自然発生的そして同時多発的に開催されることになります。

前述した「勉強会勉強会」ではこれらのノウハウを共有しているのです。

勉強会参加のメリットは(1)その分野の勉強ができる、(2)その分野の専門家や、同じ興味を持っている人と出会えるなどがありますが、その勉強会そのものの価値は、それぞれの勉強会が目指すところによってまったく異なっています。しかし、運営ノウハウなどはかなり共通化できるのではないかと考えました。Internet Week 2008、あるいはデブサミ 2009 において、多くの勉強会主催者、いわば勉強会の達人たちと議論を交わしつつ、勉強会のベストプラクティスを模索してきました。

その議論の中でおぼろげながら分かってきたことは、メリット(左辺)を上げることに多大のコストを払うと、そのコストを払えなくなった時点で持続可能ではなくなり、むしろ右辺を下げるのが勉強会を継続させるコツだということです。運営の省エネといえるでしょう。

その運営のコストを下げるために、「勉強会勉強

会」では、勉強会開催のさまざまなノウハウが蓄積されています。一例を挙げれば、勉強会会場の探し方、勉強会開催告知、運営ノウハウ、受付、当日の運営、司会の方法、動画配信方法、懇親会の開催方法、発表資料の公開方法などなどです。これらは、文書化(形式知化)することによって、他の勉強会でもすぐに実践できる事柄です。そして実際いろいろ試してみて、さらに改良することが可能です。

勉強会そのものを勉強するという「勉強会勉強会」は、勉強会運営の実験台としても機能して、多くの勉強会主催者の参加を得て勉強会カンファレンスを過去 2 回開催しています。

その実験を通じて、我々自身が学んだことは、運営そのものは十分ではないとしてもある程度は形式知化できたと考えています。ただしまだまだ勉強会そのものの価値を伝えることについては十分にできていないし、また価値そのものを言語化できているとは言いがたいと思います。

筆者は、勉強会が日本全国さまざまなところで開催され、技術者にとって、自己啓発、社外人脈の構築、新しい価値の創造などに活用されていると考えています。勉強会カンファレンスによって、勉強会運営ノウハウの共有、勉強会主催者同士のネットワーク化には一定の成果があったと思いますが、勉強会の価値の形式知化は十分ではないと思っています。

## ■ 新しい価値創造エンジンとしての勉強会という方法論

勉強会に参加しなくても、書籍やインターネットから情報を得ることはできます。しかし、人との出会いは実際に勉強会に出てみないことには得られません。そして実際に議論することによって新しい価値が生まれてくる、そのような場が勉強会だと考えます。

勉強会はその道の達人と直接会える、あるいは自分と同じような境遇の仲間を発見できる、そのような可能性に満ちています。

かつては企業の中にしか発見できなかった達人と直接出会うことができ、組織の枠を超えた仮想的

な徒弟制度の中で自分を弟子入りさせて、さらにスキルを磨いたりすることが可能になってきました。

IT 勉強会カレンダーで自分の興味のある勉強会を探してまずは参加してみることをお勧めいたします。

## 学会と勉強会

学会は古くから、研究、啓蒙、情報交換の場として機能してきました。今後もその役割は変わらないと思います。プロフェッショナルなコミュニティとして、学会員に対する互助的な側面もあると思います。

一方、会員でない人から見るとどうしても閉じている印象があるかと思います。

勉強会のインフォーマルな雰囲気の中での情報交換というのは、研究者にとっても研究の中間成果の発表議論の場として有効なのではないでしょうか。コミュニティが開いているため、もっと多くの普通の人たちと交流できる機会があります。それは、自身の研究をより深めるためにも活用できる気がします。

学会と勉強会、あるいは大学と勉強会のコラボレーションなどを推進してみるの面白いと思います。

実際、YAPC というプログラミング言語 Perl のカンファレンスは東工大を会場にして開催しています。数百人規模で開催するようなイベントだと、どうし

ても商用施設ではコスト高になりますので、大学の講堂などが利用できれば、主催者側にもメリットがありますし、大学にとっても、学生に参加を促すことができるというメリットもあります。

単に会場を提供するだけではなく、より積極的にコラボレーションすることによって、教員、学生双方にとって、新たな気づきを発見する機会を得られるのではないかと考えます。

学会あるいは大学などの教育機関と勉強会がコラボレーションをすることによって双方にメリットが生じるという観点からさまざまな試みをぜひ始めていきたいと考えています。

関係諸氏のご意見、感想などをいただければうれしく思います。

(平成 23 年 1 月 26 日受付)

吉岡弘隆 hyoshiok@gmail.com

1984 年慶應義塾大学大学院修了。日本デジタルイクイップメント研究開発センターを経て、米国 Oracle で Oracle8 エンジンの開発に従事した後、2000 年にミラクル・リナックスの創業に参加、取締役 CTO。2009 年より楽天 (株) 技術理事。カーネル読書会主宰、勉強会勉強会。

<http://d.hatena.ne.jp/hyoshiok/>

twitter:@hyoshiok